

2025年8月31日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教50「待望の日」

創世記21:6～8、ヨハネ8:54～59

ユダヤ人たちは石を取ってイエスさまに投げつけようとしていました。イエスさまを殺そうとしたのです。論争の果てに殺そうとする。この行為に至る決めては何であったのか。「はっきり言うておく。アブラハムが生まれる前から『わたしはある。』」（58節）とイエスさまがおっしゃった。この言葉でユダヤ人たちは我慢の限界を超えました。

ユダヤ人にとってアブラハムは民族の父でありました。アブラハム、イサク、ヤコブという族長と呼ばれる人たちの系譜、それがイスラエル、神の民の系譜になるわけですが、何よりその血筋であることが彼らの誇りでありました。そして誰よりもアブラハムを自分たちのルーツ、信仰の父として重んじていた。イエスさまが「アブラハムが生まれる前からわたしはある」と言われたのは、そのアブラハムに先んじてわたしは存在しているということです。言わば、アブラハムより自分がイスラエルの元祖だと宣言したということです。

世間でも、元祖や本家を巡って争うということがあります。どちらが先に始めたのか。子どもの喧嘩じゃあるまいしと思われるかもしれません。しかしこれは案外根深いものがあるように思います。先駆者（パイオニア）であること、老舗であること、先に始めた、前から知っている。そこで優劣をつけるようなことがあります。そうやって序列を作る。そういう風潮がどんな小さな集団にもあります。わたしたちもそういうつまらない特権意識に縛られて、なかなか新しい風を入れることができないということがあるのではないのでしょうか。けれどもイエスさまは言われました。「後にいる者が先になり、先にいる者が後になる」（マタイ20:16）アブラハムを父祖として、自分たちこそ正統、その血筋、本家だという特権意識がここで打ち砕かれていきます。

さらに、ここには「わたしはある」という言葉があります。これはお聞きになられたことがあるでしょう。ヨハネ福音書でも何度も出て来ますが、「わたしは～である」（エゴー・エイミ）という言葉です。この「わたしはある」は出エジプト記にあるモーセの召命のところで神さまがモーセにご自身を紹介をされた時に「わたしはある。わたしはあるという者だ」（3:14）と言われた。その言葉をここでイエスさまがおっしゃっているのです。イエスさまが「わたしはある」と自己紹介されたということは、ご自身を「わたしは神だ」とおっしゃっているのと同じことです。それがユダヤ人たちには我慢ならなかった。自分たちが知っている大工のせがれが「わたしが神だ」と言っている。どうかしている。悪霊に取りつかれている。そう考えてもおかしくないでしょう。もし皆さんがこのユダヤ人と同じ立場にいたら、やはり同じように思うのではないのでしょうか。

図らずもユダヤ人たちはここで言っています。「あなたは自分を何者だと思っているのか」（53節）イエスさまをまことの神さまとするかしないか。それがイエスさまをまことの神さまとして礼拝するか、死に追いやるか決定的な分かれ目になる。またそのことが人間の罪の本質を露わにしていくと申し上げてもよいでしょう。人間の罪を振り返って考えますと、それは己を神とすることでありました。「神のように善悪を知る者となる」（創世記3:5）その誘惑に負けて神さまとの約束を破ったのです。人類の罪の歩みは、イコール己を神とする歩みなのです。

その罪が戦争をはじめ、差別や暴力を生むのです。そこでは当然まことの神さまであられるイエスさまが邪魔になる。イエスさまを排除するようになるのです。イエスさまを殺そうとしたユダヤ人たちの根にはその罪があります。

今日のところで不思議な言葉があります。「あなたたちの父アブラハムは、わたしの日を見るのを楽しみにしていた。そして、それを見て、喜んだのである」(56節)自分たちの先駆け、ルーツと考えていたアブラハムが見ることを楽しみにしていたものがある。また実際に見て喜んだということです。この「わたしの日」とは何でしょうか。カルヴァンはこの「わたしの日」について次のように述べています。「キリストがあがない主のつとめを成就するため、人間の肉をまとしてあらわれ、世にその姿を示した時以来の、かれの国の時のことである」(『ヨハネ福音書注解』)かれの国、それはイエスさまの国、イエスさまのご支配のことです。イエスさまは言われました。「時は満ち、神の国は近づいた」(マルコ1:15)イエスさまの到来は神の国、神さまのご支配の到来です。それがイエスさまによってこの地上に現れたこと、そしてそれがやがて完成する終末のときを望み見て、アブラハムは喜んだと言うのです。それはわたしたちの考えの及ばないことでしょう。アブラハムがどうしてイエスさまの到来を喜ぶのか。それは神さまの時の中で可能なことなのでしょう。ここで重要なのは、ユダヤ人がルーツとして、先駆け者としていたアブラハムがなお見ていた、彼が先駆けとしていたものがある。それがイエスさまであるという信仰です。

ヘブライ人の手紙の御言葉を思い起こしました。「すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競争を忍耐強く走り抜こうではありませんか。信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら」(12:1~2)創造の初めから完成に至るまで歴史を貫いてイエスさまがすべてを導いてくださる。イエスさまが十字架でわたしたちの罪を贖い、三日目によみがえってくださった。そのイエスさまがすべてに先立っておられ、わたしたちと共に歩まれ、そしてわたしたちの人生を完成させてくださることを見る。この救いがわたしたちの人生に喜びを与える。楽しみを与えるのです。

わたしたちは何を見ているのでしょうか。ただ現実だけを見て、ただ過去だけを見て、自分の狭い経験値で、そこに縛られて生きていくのでしょうか。そうではありません。わたしたちの先駆け者であり、終末における完成者であるイエスさまを見る。イエスさまが先駆けということは、わたしたちもそこに続くということです。イエスさまが先を行かれ、わたしたちはその後をついていく。だから前を見て歩むのです。その時にわたしたちが行くべき道は示されるでしょう。

「楽しみにする」「期待する」ことを英語で look forward to と言います。明日から9月です。前を見て、完成者であるイエスさまを見て、イエスさまがわたしたちの人生に何を実りとしてもたらしてくださるのか楽しみにして歩み出しましょう。

天の父よ。あなたがどのような人生でありましても、わたしたちの人生をイエスさまの中に、その永遠の中に招き入れてくださることを覚えて感謝をいたします。前を見て、完成者であるイエスさまを見つめながら歩むことができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。